

## 残虐な、オオサンショウウオ移転試験、保護池での飼育を即時、中止せよ

奈良県 月ヶ瀬村石打 小山 公久

国の特別天然記念物のオオサンショウウオが、そのなかでもとりわけ多く生き残ってきた川上川、前深瀬川流域に川上ダムが、ダム本体工事を残して、すでに半分実施されてきました。

が、環境に対しては、ほとんど手をうたずして、工事が行われ、環境破壊は目をおおうばかりです。

とりわけ、オオサンショウウオに対して、とり返しのつかない行為が試験の名目で行われています。ダム湛水予定区域で確認された 100 個体のうち、すでに半分の 50 個体が、エサや生育環境整備も行われずして、上流に強制移動させられて、過密状態のため、体重減少、次には死亡に向かっている状態です。すでにく匹かは死亡しているものと考えられます。

又、保護池と称して、狭い所へ多数閉じ込め、自然のエサでなく金魚を与えている。産卵しているから、大丈夫だと言ってるのは間違っている。監獄の中でも子は産まれる。保護でも保全でもない、虐待そのものである。

上流地域の食物連鎖、生産量の生態学的調査が不十分であり、あといくら移転可能なのか、どうして現在数なのか明らかにされていない、50 匹移転させえる根拠が不明のまま数名の人しか知らずして、移転がこっそり行われた。計画を検討中とばかり思っていた。どう保護してゆくかの基礎調査の段階かと思っていたが、すでに闇で実施されていた。

その間、いつ、調査結果が公表されてきたのか、また、実施計画案を示した事があるのか明らかにせよ。国民の税金を使いながら、研究計画、調査結果を公表せず、どんどん進めるやり方が問われているのでなかったのか。みんなで知恵をしばる考えは、ないのか。

どうして貴重な動植物、自然が残りえたのか。

## 伊勢神宮領

この地域周辺は歴史文献に、伊勢神宮領<sup>むこやま</sup>六箇山として登場してき、山の民、川の民の神民が、山の幸、川の幸を神宮に納めてきた地域です。

延暦 23 年（西暦 804 年）注進の『皇太神宮儀式帳』に、「六箇山、朝夕の御饌<sup>みけ</sup>の<sup>み</sup>箕造り奉る竹原ならびに箕藤<sup>かづら</sup>、黒葛<sup>くろくわ</sup>生うるところ三百六十町伊賀国名張郡にあり。また朝夕の御饌<sup>みけ</sup>に<sup>み</sup>供え奉る<sup>あゆ</sup>年魚<sup>としうい</sup>取る淵<sup>ふち</sup>、<sup>やな</sup>築さす瀬<sup>せ</sup>一処、また御栗栖<sup>くるす</sup>二町、伊賀郡にあり。」とある。

『神鳳鈔』に「伊賀国<sup>たたらむ</sup>多良<sup>たらむ</sup>牟六箇山、五十三町五反、御饌<sup>みけ</sup>調備料、箕藤、黒葛、ならびに三度御祭（六月、十二月の<sup>つきなみ</sup>月次祭、九月の<sup>かんなめ</sup>神嘗祭）御費<sup>みにえ</sup>など雑器料、<sup>まさめ</sup>正目の<sup>ひのき</sup>檜木、そのほか<sup>ま</sup>苧麻布、紙など勤之。」

承平 4 年（934）の、伊勢市の「光明寺文書」の『伊賀国夏見郷刀禰解案』には、夏見郷にある神宮領の所在地名として「比奈知、針生、長木、布乃布、大野、太良牟、色豆、上家、菅野、土屋原、曾児、高羽をあげている。現在の地名にあてはめてみると比奈知、（不

明) 奈垣、<sup>ふのう</sup>布生、(滝之原)、<sup>たろお</sup>太郎生、敷津、<sup>こうずえ</sup>神末、菅野、土屋原、<sup>そに</sup>曾爾、(不明) と現在の名張市比奈知、<sup>くにつ</sup>国津地区、一志郡美杉村太郎生、奈良県御杖村、<sup>そに</sup>曾爾村を含む山村地帯と、それを貫いて流れる河川に当る。

そして<sup>しいし</sup>四至として東西南北の境界が示されている内の「東限 高回川」は、高尾川(深瀬川)のことで、鷹が回う川の意味かも知れない。又、「西限 栗河」は、青蓮寺川と考えられ栗の多い川を意味している。又、「鷹巣が一所あり、色豆巣と号す。」と特記されているのは、鷹のおる山があり、当時から鷹狩り用の鷹を育成する場所としていた、あるいは、<sup>はね</sup>矢の羽として鷹の羽が一番上等だったので、矢羽のため等の鷹巣山として重要性があった。

康保2年(965)「東大寺文書」『伊賀国夏見郷刀禰解案』藤原朝成の所領地として「栗林三処」あり、そのうちの「一処地は93町、夏見郷比奈知打鋤置にあり、栗山ならびに山。」とあり、比奈知に栗林があり、食料・建築木材として重要な生産地であった。その四至のうち「東 小鮎滝」も注目される。

### <sup>ない</sup>名居神社

現在、名張市下比奈知宮ノ谷

祭神 主神 <sup>おなむち</sup>大己貴命

<sup>くにつ</sup>国津大明神として祭られてきた。六箇山地域の神社は、ほとんど国津神社である。

『延喜式 神名帳』に記載された式内社で、次に述べる大村神社も同じく延喜式内社。

名居神社は「ない」と<sup>よ</sup>訓み、古代には「地」「地震」を「なぬ」「ナ牟」と訓んでいたので、本来、地震の神を祭った神社である。

『日本書記』推古天皇七年(599)四月二十七日条に「<sup>ないふ</sup>地震りて舎屋悉に破たれぬ。即ち四方に令して、<sup>ない</sup>地震の神を祭らしむ。」この時祭らした「地震神」であれば延喜式神名帳の中で「ない」が社名として残っている全国唯一の神社である。

### <sup>おほむら</sup>大村神社

現在、伊賀市青山町阿保

祭神 主神 大村神

配神(春日三神) <sup>たけみかづち</sup>武甕槌神(鹿島神) <sup>ふつぬし</sup>経津主神(香取神) <sup>あめのこやね</sup>天兒屋根命(枚岡神)

春日三神は、神護景雲元年(787)鹿島神宮から三笠山に勤請した途中、この地に立ち寄られた時に合祀されたと思われる。

<sup>かぬめいし</sup>要石 境内に祭られており、地震の神様として崇拝されています。

『鹿島神宮社例伝記』では、鹿島神宮にある要石は、鹿島の神が降った時、御座にした石であり「山の宮」と呼んでいる。

茨城県の鹿島神宮と千葉県の香取神宮の要石が有名で、地中であばれて地震を起す<sup>なまず</sup>大鯰を鹿島の<sup>たけみかづち</sup>武甕槌神が要石で押さえているという、地震を鎮める要石である。

大ナマズとはオオサンショウウオのことで大地の神として、古代から<sup>あが</sup>崇め<sup>おそ</sup>畏れ<sup>たてまつ</sup>奉ってきた。

大村神社の祭礼には、神社前の石打川（木津川）で河原石を石打して、驚いて浮かんできたアユを取り、神に供える。これはオオサンショウウオ、地震の神様に捧げる行事であるとも考えられる。

名居神社、大村神社と古代からこの地の神社が、どうして地震の神様をお祭りしてきたのか、よく考えていただきたい。

平城<sup>なら</sup>の都に藤原氏が一族の祖、天児屋根命をお祭りする春日大社を建てられた時、鹿島香取の神をお連れする途中、この地に寄られ関西の地を鎮める要石とされたもので、この地域が、どれほど重要な地であるか、守ってゆかねばならない聖地です。